

松田 隆美

『コロキア』が創刊されたのは私が修士課程に入学した年で、誌名も含めてアメリカ文学の大橋吉之輔先生のご発案であった。過去に英米文学専攻が刊行した学術誌としては、イギリスから帰国した西脇順三郎が中心となって 1929 年に創刊した *English Literature and Philology* がある。この研究誌には、西脇順三郎や戸川秋骨をはじめとして、刊行時にはまだ学生だった石丸重治、厨川文夫、樋口勝彦等が寄稿している。厨川文夫の『ペーオウルフ』の対訳や、樋口勝彦のエリザベス朝演劇に関するラテン語の論文を掲載し、その内容、装幀共に極めて充実したものであったが、残念ながら 1933 年の第 4 号で休刊となってしまった。その十倍の長さ続いているわけだから、たいしたものである。

これまでの 40 年の間に記念号も何度か刊行されている。最初は 20 周年で、この特別号には安東伸介、岩崎春雄、山本品の 3 名の名誉教授が深みのある文章を寄せている。また「三十五周年特別記念号」(2014)では、高宮利行名誉教授が、『コロキア』に掲載された大学院生の論文が海外で注目された具体例を挙げて祝辞とされている。

私自身も記念号に寄稿する機会があった。20 周年記念号には近代初期絵画のなかに描かれる書物に関する小論を寄稿したが、そのなかでイグナチオ・デ・ロヨラの *colloquium* の概念に言及した。イグナチオ・デ・ロヨラは『靈操』のなかで、黙想は「友が友に語るように、また僕が主人に語るように語りあう」主との対話に究極的に至ると述べている。また、第 30 号への巻頭言を依頼されたときには *colloquia* の語源に言及した。図らずも私は、10 年周期で『コロキア』という標題にこだわってきたことになるので、この 40 周年の機会にも再びコロキアの意味に触れたい。

現在の日本中世英語英文学会の前身に中世英文学談話会という研究組織があり、私が博士課程の 1 年目に初めて学会発表をしたのもその例会だったが、その英語名は *Medieval English Studies Colloquium* であった。現在では *colloquium/colloquia* というと学会や学術セミナーを指すことが多いが、元来はラテン語で会話や対話の意味で、動詞の *col(con)-loquor* (一緒に話す) と同語源である。OED によると英語でも 17 世紀にはそのような意味で使われている。私にとってもっとも印象深いこの語の用例は、第 30 号の巻頭言でも紹介したが、アウグスティヌスが『告白』のなかで、友人との交わりについて回想している箇所である。

わたしたちはともに語り(*conloqui*)、ともに笑い、互いに親身になり、ともに心にしみる書を読み、冗談をかわし、尊敬し合った。... また互いに教え、教えられ、いない者を気をもんで待ち、来れば喜んで迎え入れた。

論文執筆は基本的に孤独な作業だが、キャンパスでは「ともに語り、ともに笑う」(*conloqui et conridere*)、そして「ともに飲む」(*combibere*)ことを大切にしてほしい。院生の数自体が少なく、先輩も同級生もほとんどいない大学院もあるが、幸いなことに義塾の文学研究科はそういうことはない。私たちの『コロキア』は対話の成果に他ならない。

(慶應義塾大学文学部教授)